

世界の歴史認識をめぐって その1

—終末論と発展史観について—

塚 本 剛

Interpretations of World History with Special Emphasis on the Difference in Apocalypticism between Judaism and Marxism

— Marxism's historical view comes originally from Apocalypse in Judaism —

TUKAMOTO Tuyoshi

はじめに

私は、工学院大学においてGE設置科目の「世界の歴史認識」という講義を担当している。そこで、講義するにあたって、考察した所見を歴史家としてまとめてみたいと考え、本稿を起こすことにした。

最近また、我が国では終末論が盛んなようだ。曰く、「マヤ暦が2012年12月23日で終了するというのは、計算間違いで、実は2015年9月が正しい」¹などが、それであるが、これまでもこの手の終末論は、手を変え、品を変え登場しては、世間を騒がせ、それが外れると、嘘のようにそのなりを潜め、大衆はまた新たな終末論にわく、という言わば愚行を繰り返してきた。覚えているだけでも、1999年の7月に、人類が滅亡するというノストラダムスの大予言、2012年の惑星ニビル²の地球大接近によるカタストロフィー、元祖「マヤ暦の予言」とされるマヤ暦が2012年12月23日までしか存在しないためこれをもって歴史が終了するといったものなどが近年の代表的なものと言えるだろう。

しかし、終末論の元祖というか、老舗的存在と言えば、やはり、ゾロアスター教、またその世界観を継承した、ユダヤ、キリスト教的な終末論である黙示録的世界観であろう。それによれば、世界の終末には、ハルマゲドンと呼ばれる、神と悪魔の世界最終戦争があるとされ、神側が勝利し、その後、最後の審判により、「神の国」に行ける者と地獄の業火で永遠に焼かれるものとに分別され、「神の国」に行った者は、永遠の樂園での生活が享受される

という。

この世界観はゾロアスター教を除けば、一神教においてのみ成立していることに留意が必要であろう。しかも、この黙示録的世界観＝聖書の終末論は先に挙げた終末論とは本質的に大いに異なっている。それは、先に挙げた終末論が単に世界の終わりに過ぎないのに対し、聖書の終末論は、そこに人類の救済が置かれている点にある。

これらの相違が歴史認識＝歴史観にいかなる影響を与えるかについてを中心に考察していきたい。

1. 「宇宙的終末論」と「歴史的終末論」

世界の宗教は、一神教と多神教に大きく分かれる。多神教的世界観では、まずコスモス＝世界ありきで、神々も人間もそこから誕生する。神々よりもコスモス＝世界の方が上位概念であり、圧倒的に偉い。神々が誕生する以前より、コスモス＝世界はそこに存在し、明確な始点も持たない。また、そこにおいては、快々として時間は循環するものとされる。よって、明確な終点を持たない場合も多い。

これに対し、ユダヤ、キリスト教的な一神教では、まず神ありきである。世界は単なる神の被造物に過ぎない。それは天地と言い換えても良いであろう。よって、創造された天地には明確な始点がある。しかも神に背き、最後の楽園＝エデンを追放された人類は、永遠に見捨てられた存在ではなくして、預言者を介して与えられたトーラー＝律法を遵守しさえすれば、或いは、メシア＝救世主とされたイエスを信じ抜きさえすれば、それは最後の審判で救済がなされうるとする終点に希望をおいた時間認識がなされている。つまり天地創造という明確な始点と、最後の審判という明確な終点＝終末を持つ言わば時間が限定された認識を持っている。

時間と空間という両軸で設定された時空間に固有の意義を持たせた文化を歴史と称する以上、これほど明確な歴史認識を持つ世界もないであろう。人類は、その最終段階において、すなわちゴールにおいて救済という目的が果たされるのであり、よってこの固有の意義とは換言すれば、目的とは、神による救済である。神による救済がなされたということは、目的が果たされたのであるから、そこがゴールであり、逆にゴールに到着したということは、目的が果たされ、神によって救済がなされたということになるのである。その終点で固有の意義を持たせた時空間認識＝歴史は文字通り終わるのである。歴史の終わりでは永遠の楽園＝神の国が到来するのである。この歴史認識では初めから終末に希望が設定されている。人類は、時間の経過とともに、より神の国に近づくのである。そこでは昨日より今日、今日より明日、確実に神の国に近づくのであり、そういった意味において、明日とは単なる24時間後ではなくして、希望の象徴と言えるだろう。

プロクシュ³はそれについて、旧約聖書の終末論はイスラエル独自の作物であり、預言者

的行為がイスラエル特有なものであるように、ヘブライ的知性は最初から将来に対する希望によって捉えられていたとしている。

よって多神教に終末が設定されていた場合とは大いに異なる。多神教のそれは、言わば、「世界の死」であり、世界の破局である。聖書の終末論は歴史的救済における希望が明確である。よって聖書の終末論は本来的に救済であって、破局ではない。聖書の終末論は多神教の世界破局論の性格は全くもっていない。多神教の世界に散見される世界破局論は「世界の死」である以上、自然的異変の性格を有する。しかし、ヘブライ人にとってそれらは、絶望ではない。彼らにとって絶望とは救済がなされないことに他ならない。これは後に詳述する。

だが、周知のように、キリスト教の最初期に終末を描いたとされるマルコ福音書や、またヨハネ黙示録などでは、世界破局論が終末論の中に受容されているが、やはりメシア再臨により救済がなされるのである。

青木保⁴は世界破局論と聖書の終末論を明確に区別している。すなわち

非歴史的世界の死的な世界認識から結局、終末論が生起しないものとすれば、終末論こそは、歴史的世界認識、つまり人間の歴史的経験に大きく係わるものと言わねばならない。と、指摘している。また、ブルトマン⁵は、世界破局論から聖書の終末論の成立を見いだしている。世界破局論をブルトマンは「宇宙的終末論」とよび、これが歴史化したもの＝聖書の終末論を「歴史的終末論」としている。

世界の死だけではなく、救済という形で完成された後に、聖書の終末論が成立するのである。かかる終末論を持ち、希望をゴールに置くからこそ、発展史観が形成し得たのである。ブルトマンの言う歴史化とは西欧伝統の発展史観に他ならない。

2. 歴史的世界観と終末論 ～ユダヤ教とキリスト教～

これも前稿⁶で検討したように、終点の否定は希望の喪失となる。それは終末論の放棄のみならず、西欧伝統の発展史観の放棄となる。ユダヤキリスト教的文化圏の西欧人にとっては、これこそが、先に触れた絶望ということになるであろう。

ニーチェの言うように永劫回帰を指向することは、永遠の今日を生きることになる。それはコスモスへの回帰を意味すると言っても良いであろう。これはまさに超人でなければ耐えられないことであろう。そして、それはユダヤ人にとって「メシアが来ない」ということであろう。或いは、ユダヤ系のレーヴィット⁷がニーチェに従うのはむしろ「メシヤは来ない」という絶望の裏返しなのであろうか。

メシヤは来ないという神学的前提が無くなった状況で、19世紀のマルクスは前稿で検討した通り、科学的歴史観を標榜しつつも、実は自らもまた神学的前提に立って、唯物論的発達史観を形成した。しかしその虚妄が見抜かれた20世紀においては、レーヴィットのように、ニーチェ的な虚無に至るしかないであろう。

キリスト教においてはメシアは来た。よってこの後に別のメシアも預言者も来ることはない。キリスト教徒がイスラームを否定する所以である。しかし、メシアが来たならば、換言すれば、イエスがメシア＝キリストならば、神の国が実現されねばならない。ここにこそ、ユダヤ教がイエスを認めない最大の理由があるように思える。私の知人にユダヤ教のラビに以下の質問したことがある者がいるのだが、すなわち、「どうしてキリスト教を認められないのですか」と聞いたのである。知人は当然、神学的教養体系で答えてくるものと待ち構えていたが、そのときのラビの答えは、唯、一言こう答えたそうである。「窓の外を見て下さい、これが救世主が来た後の世界でしょうか。」簡潔にして要を得た、説得力ある返答と言わざるを得ない。

しかし、キリスト教においては新約聖書ルカ福音書に「神の国は見られるかたちで到来するものではない。」という主旨の言があるのに留意せねばならないであろう。つまり、神の国は、不可視ではあるが実現しているということになるであろう。目に見えない神の国は、自らの実在を証明するために、完璧な姿での可視化、顕在化を志向せざるを得なくなるはずである。恐らくそれが、神の国を覆っているこの世界の破局＝「世界の死」のあとに、行われるのであろう。これは来るべき未来のキリストの再臨によってもたらされるのであろう。

よってユダヤ教にしろ、キリスト教にしろ、未来に終末論が想定されることになると言えるだろう。まさにコスモスの破滅は世界の破局に過ぎず、これは「宇宙的終末論」であり、これに救済が、加わって初めて「歴史的終末論」になるのである。そう言った意味では現世の破局が必然的でないとならないキリスト教のモデルのほうがより完成度が高いと言えなくもないのではないだろうか。

しかし、ここでいうキリスト教とは、現行の新約聖書を規定したカトリック、またそれを批判的に継承したプロテスタントで現在、使用されている新約聖書に基づいたものである。

そもそも現行新約聖書は、ローマ帝国でキリスト教を国教にする以上、無用の混乱を避け、国家として公認の公式見解を定める必要があり、そのため教義を統一するにあたり、アリウス派、ネストリウスは、コプト派を異端としてアタナシウス派を正統として採用したことにより、アタナシウス派のテキストが残されたものである。換言すれば、アタナシウス派の解釈に違反しない各書により成立している。さらにそれも、原版があつて何度も改訂が行われたことで現代に伝わる形になったことが推測されている。また、初めから現在のような正典として登場したわけではなかった。教父たちの文書によって、教会内で正典的に読まれる文書群には一定の振幅があったことは周知の事実である。それが歴代の公会議で何が正典かが確認されている。しかし一貫してアタナシウス派＝カトリックの解釈でそれがなされてきたことは言うまでもない。

そうであるならば、それ以外の教義を奉ずる、別の宗派においては別のテキストもあったわけであり、それが現在の聖書のようなユダヤ、キリスト教的な終末論をもつのかは検討の必要があると言える。そして結論から言えばどうもユダヤ、キリスト教的な終末論をもって

いないものがあると言えそうなのである。その代表的なものは近年発見された「ユダの福音書」⁸である。これは、紀元前2世紀の教父エイレナイオスの著書『異端反駁』により、その存在は知られていたが、テキストそのものは亡んだとされていたものである。

この書はグノーシス主義に則っていたが、マービン＝マイヤー⁹によればアルゼンチンの作家ボルスはグノーシス主義¹⁰を論じた文章の中で

「もしローマでなくアレクサンドリアが覇権を握っていたならばここで概略を紹介した突拍子もない話の数々も、一貫性がある威厳にあふれた正当な逸話ということになるだろう」

と触れている、とする。

その突拍子もない話とはユダの福音書では、驚くべきことに「この世界を創造したのは唯一絶対神ではないこと、この世界は邪悪な世界であること、イエス＝キリストは創造主の息子ではないこと、救済はイエスの死と復活ではなく、イエスが明かす秘密の知識という啓示によってもたらされる」とまとめられるであろう。

今日の聖書の見解と余りに違うので面食らってしまうが、キリスト教のいずれの宗派も、自らの思想を立証する聖典を正統だと主張したはずであり、その教義はイエスから直接もたらされ、それは預言者イエスを通じて神からもたらされたものとしたはずである。この2世紀から4世紀にかけての神学論争の中で、グノーシス主義は破れ、ユダの福音書も廃れた。

グノーシスとはギリシア語で知っているを語源とし、知っている人たちを指すものと言える。では、何を知っているのか。それは救済に至る方法である。グノーシス派では信仰によって救済されるのではなく、真理を悟ることで救済されるのだ。その知識を伝達するのがイエスである。バート＝D＝アーマンによれば、グノーシス派の代表的な考え方の共通するところについて、

最高神は、物質性も特性も持たない完全な霊性なので、この世界から完全に離れている。この神はアイオンという多くの子孫を生んだ。初めはこの神やアイオンが住む神の国は、遍く存在していた。だが、宇宙に大惨事が起こりアイオンの一つが神の国から落ち、その他の神々の創造へとつながった。だから、神の国以外にも、神々は存在するようになった。これらの下級の神々は、私たちの物質世界を作った。これらの神々は、捕まえた神性の輝きを閉じこめておく場所としてこの世界をつくり、人間の身体の中に閉じこめた。つまり特定の人間は、その中心部分に神性の要素を宿しているのだ。(中略) だからこれらの魂は、この物質世界を逃れて、神の国に帰る必要がある。(中略) 救済のための秘密の知識は、どのように学べるか。

(中略) 天が授けてくれる啓示を知る必要がある。私たちの出自や、目的地や逃れる手段についての真実を伝えてくれる精神世界からの使者が必要なのだ。キリスト教グノーシス派の教義では、この真実を明らかにするために天から来た人が、イエス＝キリストだ。であるとしている。つまりこの世界には2種類の人間がいることになるのだ。限られた神性

を宿している人間と、低級神が創ったそうでない人間がそれであり、救済されるのは専ら、神性を宿した人間だけなのである¹¹。また、ユダの福音書ではイエスは、「不死の王国バルベール」からきたとユダによって明らかにされていて、旧約の神である創造神とは別系統の存在であることも明らかにされているが、これは今まで知られていたグノーシス派の世界観と一致する。

この世界観は、非ユダヤ、キリスト教的神学と言え、極めてギリシア哲学的であると言える。救済は自動的にやって来るものではなく、イエスの力を借りるとは言え、学んで悟らねばならないからである。つまり、この世界の最終的な意味が、終末にもう決定しているものとして設定されているのではないのである。設定されているのであれば、学びは無意味である。それは既に決定されているからだ。しかし、ユダの福音書、その他のグノーシス派の世界観では、学びが必要になる。コスモスには最終的な意味があらかじめ込められていないのでギリシア人たちはその根源を問うた。哲学が真に哲学であるためには神学的前提を排除せねばならない。それが実現されている世界観と言えるだろう。しかも最高神が完全な霊性で、この世界とは別の世界の存在し、いくつかの神が転落してきたという構造そのものは、直ちにプラトンのイデア論を想起させ、新プラトン主義との関連を疑わずにはいられない。マービン＝マイヤーによれば

2世紀半ばには、このようなプラトン主義の思想や中期プラトン主義あるいは、新プラトン主義の概念を取り入れたセツ派の文書が流布していた。

という。

さらに言えば救済が予め決まっているというのは予定説の原型とは言えないだろうか。

そしてユダの福音書では、その神性を宿したイエスの唯一の真の弟子としてユダを設定している。これについてパート＝D＝アーマンは、

この福音書では、ユダがイエスが何者かを理解していた唯一の弟子であるし、救済に至る秘密をイエスが明かした唯一の弟子だからだ。その他の弟子たちは、旧約聖書の神を崇拜していたので、間違った聖職者になるのだ。ユダは真実を知っていたので、イエスのために最大の奉仕をした。つまり、イエスのなかの神性が、肉体の牢獄から逃れることができるように、イエスを引き渡して死に至らしめたのだこの福音書の中で、イエスはそのことを非常に説得力のある言葉で伝えている。「おまえは真の私を包むこの肉体を犠牲とし、総てので弟子たちを超える存在になるだろう」

と、している。

従来から、ユダを邪悪な裏切り者とする解釈について疑問視する声も少なくなかった。というのも、そうでなければ、イエスが十字架上で亡くなり、全人類の罪を贖罪したからこそ、信者は罪があがなわれたのであり、そしてその後イエスが復活したからこそ、真の救世主＝キリストとして確立したのであり、そうでなければ、キリスト教信者は、未だに救済されないことになるのだ。ユダの福音書の記述の方が、すぐれて合理的と言えないだろうか。

さて、ユダの福音書は通常、「ユダの裏切り」と呼ばれる場面で終わっている。これはどういうことだろうか。パート＝D＝アーマンは

ここに復活はない。おそらくこの点が最も重要だ。この福音書では、イエスは死からよみがえることはない。そんな必要はないからだ。救済の意義は、この物質世界から「逃れる」ことである。死体の復活は、人を再び創造主の世界に引き戻すことになる。魂がこの世界を去り、「偉大な、神聖な世代、つまり、この世界の優る神の王国に入るのが目的なのだから、肉体の復活など、イエスは到底望むわけがないし、彼の真の弟子も誰ひとりとして望まないだろう」

としている。この世界観では神性を宿した存在は個体として救済されて、幸福であろうが、この秩序世界構造全体の意義は語られていないし、この世界に限ってもその時間は止まらない。つまり結果としてコスモスの意義づけは問われねばならない。つまり、歴史の目的意味が予め決定されているわけではなく、ギリシア哲学同様それは求められねばならない。

終末論で貫徹されていたと考えられていたキリスト教にも実は別の可能性があったことがわかったが、そうなると、現行のキリスト教も本当に首尾一貫、終末論で解釈されていたのか検証を要しよう。

アリウス派、ネストリウス派、コプト派、グノーシス派などを退け、アタナシウス派を正統思想として確立した後の古代はまごうことなく、終末論が公式見解であったろうが、果たしてそれ以降はどうであったのだろうか。中世の神学は一般に、トマス＝アキナスの信仰と理性の調和で集大成されたとされるが、これは一体どのような意味において言われているのであろうか。

まず、中世初期の教父で『神の国』を著したアウグスティヌスを見ていこう。ドーソン¹²によれば、アウグスティヌスの功績は、時間が循環するという命題を否定したことにあるという。しかし、アウグスティヌスの神の国の概念はプラトン主義の影響が色濃く見いだされ、ユダヤ、キリスト教の歴史認識とプラトン主義の同居が形成されていると言え、既に、正統的な純粋に終末論を奉ずる聖書的歴史認識とは外れてきている。

アンリ＝フォション¹³は終末論について

教会の公認の教義から消え去ったかにみえたが、宗教思想のある種の領域では不思議な力を保っていた

としている。これは裏を返せば、公式にはやはり終末論が中世では事実上消えているのである。

トマス＝アキナスは世界を自然と、超自然に分けて捉えているが、自然についてはプラトンからアリストテレスに依存しており、超自然についてはアウグスティヌスに依存しているので、この両者を統合したと言われている。これこそが信仰と理性の調和であろう。

このスコラ的文化総合は宗教改革で崩壊することになる。周知の通り宗教改革はルターが贖宥状に反対してカトリック教会に95箇条の論題をたたきつけたことにより始まる。ルターが許せなかったのは、当時の教会が、イエスが主張したわけでもないことを、公然と教

会の正式な見解としていたことであった。ここでルターが則ったイエスの主張とは何によるかと言えば、それは新約聖書であった。ヴォルムスの帝国議会もそれでの乗り切ったルターの立場こそ聖書中心主義である。当時どうして多くの民衆が教会の主張を鵜呑みにしたかと言えば、それは聖書が読めなかったからである。そこでルターは、当時の最新技術である活版印刷術により、当時の口語訳の新約聖書を出版し、これを流布させることにより、教会よりも自説が正しいことの証明を行ったのである。

これは、中世で苦勞して完成された信仰と理性の調和のうち、理性を取っ払ったものに他ならず、スコラの文化総合からアリストテレス哲学が排除されたと言える。終末論的世界の復権と言って差し支えないであろう。宗教改革のなかでそれが最も強力なたちであらわれたのはカルヴァン派の中でもピューリタンが起こしたピューリタン革命であろう。それは大陸ヨーロッパで先行して起こった宗教改革の集大成と言え、最も徹底的な聖書中心主義であった。その立場を良く表しているのがウィリアム＝エイズとされる。またミルトンの『失樂園』には救済を軸とした神学構造が認められる。樂園が回復されることにより完結する終末論伝統の歴史的過程と言えるだろう。知識人の間でこれらの文学が支持されていたことは、かかる世界観が一般化していたことを意味しよう。実際、岡崎勝世¹⁴によれば、ニュートンは、聖書や伝説にある出来事の年代確定に天文学手法を採用し、キリスト教的歴史観である普遍史をプロテスタント的史観で再構成し、また「ダニエル書」や「ヨハネ黙示録」を解釈し、終末論を展開している。

また、17世紀は科学革命の時代で有り、科学的な手法を確立するための認識論が完成されていったが、大陸合理論に対してイギリスでは経験論が醸成された。ロック¹⁵は、人間は観念を生まれつき持っているという生得説を批判して、観念は経験を通じて獲得されると主張した。ここで言う経験とは客観的で公的な実験、観察といった意味合いであり、真理をこのような方法で認識するという世界観はすぐれて歴史的で有り、この時代の認識論＝経験論にも歴史的認識が結実されていると言える。イギリスにおいて学問の中でも歴史が尊重される所以は経験を通じて真理を探ろうという伝統があるからである。

この経験論とそれに対立した合理論はカントにおいてドイツ観念論として統合され、そこでは経験論における歴史的認識を継承し、人間にとっての自然的素質は本能ではなく、理性によって幸福や完璧さを目指すことであり、人間が己の自然的素質を実現するプロセスとして人類の歴史をとらえる歴史哲学が完成された。これを批判的に継承したのがヘーゲルである。カントと違いヘーゲルは普遍性を求めたので、彼の認識論では国家、民族、歴史といった具体的なものに倫理の原理を見いだした。よってカントのように人間の求める自由を道徳律のみによって実現されるものではないとし、人倫によってそれはなされるとした。人倫は、家族、市民社会、国家の三段階でとらえられ、高次の段階へと止揚する原理として弁証法が提唱され、歴史もその法則に支配されるとした。つまりヘーゲルにおける歴史とは弁証法的に発展する世界の過程である。

ヘーゲル歴史哲学を批判的に継承・発展させた人物としては、セーレン＝キルケゴール、カール＝マルクスなどがある。このカール＝マルクスこそが唯物論的発達史観を確立し、それが、20世紀において最も隆盛を誇った歴史認識であることは言うまでもない。こうしてみえてくると、宗教改革で終末論は復権して、その教義であるプロテスタント神学は終末論を抜きには理解できないと言っても過言ではないのではないだろうか。そう言った意味では終末論は20世紀になって完璧に再燃したと言えるであろう。

小 結

以上、検討してきた通り、終末論は「宇宙的終末論」と「歴史的終末論」に分けられ、前者は単なる世界の破局を表すのに過ぎないのに対し、ユダヤ、キリスト教において本質的な終末論である後者が完成された。しかしこの終末論は、少なくともキリスト教においては、総ての宗派が則っていた見解ではなく、グノーシス派に見られるような解釈も存在し、ここでは、ギリシア思想、おそらくは新プラトン主義と思われる思想の潮流に強い影響を受け、コスモス的世界観が、通行していたことが確認できた。さらにいったん確立した終末論を奉ずるアタナシウス派＝カトリック教会においても、中世になると、ギリシア的世界観の大きな影響を受けて公式には終末論的世界観は大きく後退し、現在支配的なユダヤ、キリスト教的終末論が復活するのは実は聖書中心主義が叫ばれた宗教改革以降であるということが確認できた。終末論がこうして時代や地域によってキリスト教世界でも動揺しているならば、換言すればヒストリーよりコスモスが優位に捉えられることがあるのであれば、その立場における歴史認識を模索するのも間違いでは無かろうと考えられる¹⁶。そうであるならば、次稿では本稿で紙面の都合で検討できなかった現代における終末論を取り上げ、20世紀以降において歴史の終わり¹⁷がどうとらえられたかを考察した上で、「世界」と「歴史¹⁸」と「世界史」について検討し、ユダヤ、キリスト教的歴史観である発達史観を相対化し、新たな歴史認識提唱への可能性を検討していきたい。

最後に、私は歴史研究者として歴史認識の講義を担当し、歴史家として当然考究すべき歴史認識についての問題を考察している。よって神学や哲学の専門家ではないので当該分野の専門家からすれば、当然当たるべき文献に遺漏があったり、あるいは誤解があったりすることは十分に想定できる。よってそれについて大いに教授を受けたく考えている。御指正を賜りたく存ずる所以である。併せて歴史家としての歴史認識の一端と考えて頂けると幸甚である。

注

- 1 「マヤ暦が予言する人類滅亡は2012年ではなく2015年だった」(週プレNEWS) - 2012年12月24日によれば、「マヤの暦の驚異的な精密さはすでに広く知れ渡っており、解説は最優先課題とされた。何しろ、暦さえ解説できれば、各遺跡の石壁に刻まれた日付などで、正確に遺跡が完成した日が確認できるのだから当然だろう。ほどなくマヤ文明研究の第一人者である、グッドマン、マルティネス、トンプソンの三博士の研究によって、現在のグレゴリオ暦とマヤ長期暦との換算に使われる「GMT 係数」なるものが発表された。現在に至るまでマヤ全土の遺跡調査と年代確定には、すべてこの係数が使われてきた。

ところが、近年、この GMT 係数が完全ではないことが指摘されるようになり、ついにマヤ暦研究の第一人者であるアメリカのロバート・ワナメーカー氏がこの間違いを認めることになった。「世紀の計算ミス」の内容を大まかに説明すると、マヤ長期暦の1周期を約5000年としてグレゴリオ暦に換算した場合、4年に約1日増える「うるう年」を計算に入れていなかったというのだ。つまり、 $5000 \div 4 = 1250$ 日もの誤差が出ており、誤差を修正すると、マヤ長期暦の終わりの日は、西暦2012年12月23日から1250日後の2015年9月3日になるというのである。ただし、これは「人類滅亡の日」が単に3年延期になったという話にとどまらない。新たに出てきた「2015年人類滅亡説」は、思わぬ場所で波紋を呼んだのである。「マヤの人類滅亡の日」の修正に慌てふためいたのは、エジプトの研究者、それも古代エジプト暦の研究家たちだった。彼らはいったい何に驚愕したのか……。時はいったん1970年にさかのぼる。エジプトの人々は、毎年氾濫するナイル川に悩まされ続けていた。それを解決するため、ナイル川上流に超巨大なダム、アスワンハイダムが建設された。しかし、その影響で古代エジプト文明の聖地とされていたフィラエ島のイシス神殿は半水没状態となってしまったのだ。この神殿は、エジプト神話の女神イシスが太陽神ホルスを産んだ場所とされていて、惨状を憂えたユネスコにより、1980年に神殿はアギルキア島に移築保存されるために徹底調査されることとなった。その結果、神殿の壁には1465体の神々が描かれていることがわかったのだが、このことがエジプト暦の研究者たちを震撼させた。西暦550年に閉鎖されたこの神殿には、「この場所が閉鎖されれば毎年、秋分の日に一体ずつ神々の加護が失われ、すべての神々が去った年の秋分の日の世界が水没するだろう」という伝説が残っていたのだが、ナイル川の氾濫など毎年のことで、研究者たちも「神を粗末にすると報いを受ける」という伝承程度に受け止めていた。だが、1465体の神々が描かれていることがわかり、西暦550年から毎年、一体ずつの神々が去るとすると、なんと西暦2015年の9月に世界が水没することになる。これまでエジプト暦の研究者たちは、マヤの人類絶滅予言と約3年のズレがあったことで、この伝説をさほど気に留めていなかった。ところが、マヤ暦のズレが指摘され、ふたつの暦の示す終末の日がピッタリと一致することに気づき、一気に大騒動となったわけだ。そして今、エジプト暦の研究者たちは、この2015年世界水没説について本気で警鐘を鳴らしているという。時代も場所も違うふたつの超文明の暦が示す「滅亡の日」の信じ難い一致。これは偶然というには、あまりにできすぎた話ではないだろうか。」という記事を掲載している。マヤ文明では歴史は繰り返すという観念があるにも関わらず、13バクトゥンで終了するかのようなサイクルの解釈についても、すぐれて西洋的なものであると言えよう。マヤのカレンダーにはいくつもの周期が存在するが、いずれの周期でも現サイクルが終了すれば新しいサイクルに入り、永遠に循環していくとされているにも関わらず、明確な終点=終末を想定するところにユダヤキリスト教的世界観の片鱗が見られると言えるだろう。

- 2 シッチン『人類を創成した宇宙人-NASAも探索中太陽系「惑星X」に実在するエイリアン』(徳間書店1995年)によれば、ニビルとティアマトの伝説は、3600年周期の楕円軌道で太陽をまわる惑星で、アメンナキという知的生物が住むという惑星ニビルは、第5番惑星ティアマトに自らの衛星を衝突させ、ティアマトを崩壊させたとする。

そのニビルについてマーシャル・マスターズ、ジャニス・マニング、ヤッコ・ファン・デル・ウォルフが、『2012年に地球最接近! 惑星Xが戻ってくる 大変動サバイバルガイド』(徳間書店、2009年)で「未知の惑星Xが、2012年の12月、地球に接近する。その天体の名はニビル」という衝撃の内容を発表した。

以下に、ニビルについての概略を述べる。

そもそも、1982年にアメリカ海軍天文台で、ロバート・ハリントン博士らは、太陽系の惑星について研究を行っていた。その結果、太陽系のすぐ外側に、もう一つの惑星が存在する、と結論づけ、その星に『惑星X』と名付けた。そして1982年、NASAは、驚くべきことを発表する。1972年に打ち上げられた

木星探査機パイオニア10号、さらに、その翌年に打ち上げられたパイオニア11号には、実は、惑星Xの手がかりを探す目的もあったという。

そして1982年6月、NASAはその調査によって、天王星と海王星の軌道に、歪みが生じていることを確認。それを受けて「何らかの天体が、影響を与えていることを示すものである」と発表した。

しかし、この時点では、惑星X、すなわちニビルの存在は、あくまで推測に過ぎなかった。世界中の天文観測家が試みるも、その存在を捉えることはできなかった。ところが、NASAの発表から6年後の1988年に、ニビルに関して研究を続けていたロバート・ハリントン博士らは、世間に衝撃を与えるある仮説を発表した。それによるとニビルの大きさは、地球の4～5倍もあり、質量は20～25倍、密度は100倍、約3600年周期で、太陽の周りを回り、その軌道はすでに知られている太陽系の惑星とは全く異なり、極端な楕円を描いているという。さらに博士らは、その天体は褐色矮星ではないかと分析した。天体望遠鏡でその姿を捉えることは難しいという。

全く根拠のないお騒がせ情報も多々あったが、イギリスの公共放送BBCでは学者たちの証言や、コンピュータを使いシミュレーションを行うなど、科学的にニビルを検証した。

さらに、ロシアの科学番組でも、ニビルが地球に接近する可能性について特集し、大きな反響を呼んだという。そしてモスクワの街には「惑星が接近する」と書かれたポスターまでも出現した。

- 3 プロクシュ『旧約聖書神学：他二篇』（東京神学大学）参照。
- 4 青木保『始原論と終末論』（『海』中央公論社、1970 6月号）参照。
- 5 ブルトマン『歴史と終末論』（岩波書店、1986年）。
- 6 塚本剛『新しい歴史認識構築に向かって～所謂発展史観の超剋と現代日本の理解をめぐって～』（『研究年誌』第59号、早稲田大学高等学院、2015年）参照。
- 7 レーヴィット『キェルケゴールとニーチェ』（弘文堂1943年。未来社1967年）、『ヨーロッパのニヒリズム』（筑摩書房1948年。新版1974年）、『ヘーゲルからニーチェへⅠ・Ⅱ』（岩波現代叢書1952年-1953年）、世界と世界史』（岩波現代叢書1959年）、『ウェーバーとマルクス』（未来社1966年）、『ニーチェの哲学』（岩波現代叢書1960年）など参照。
- 8 ロドルフ＝カッセル、マービン＝マイヤー、グレゴール＝ウルスト、バート＝D＝アーマン編著『原典ユダの福音書』（日経ナショナルジオグラフィック社、2006年）参照
- 9 注8参照。
- 10 1966年4月にイタリアのメッシーナ大学でグノーシス主義研究者たちの「国際コロキウム（シンポジウム）」が開催され、メッシーナ提案と通称する学術的な定義の提案が行われた。この提案で、紀元2世紀から3世紀頃のキリスト教グノーシス体系を「グノーシス主義（Gnosticism）」と定義し、より広い意味での「秘教的知識」の歴史的カテゴリーを「グノーシス」と定義した。しかしクル＝ルドルフによれば、必ずしもこの定義が定着したわけではなく、一般に「グノーシス」ならびに「グノーシス主義」という言葉は同義語として用いられているとされる。グノーシス主義に関する初期のキリスト教文献、初期教会教父たちによる種々の異端反駁文書の中において、グノーシス主義はキリスト教内部の異端思想として扱われている。リヨンのエイレナイオス、オリゲネス、エウセビオスなどがグノーシス主義を主要な対象として、正統信仰擁護の著作を残している。彼らの著作から、初期の聖書解釈やキリスト教神学の成立にグノーシス主義の影響が多であること、そしておそらく彼らの時代には、グノーシス主義的なキリスト教文献は正統信仰の著作を量において上回っていたと考えられている。

アドルフ＝フォン＝ハルナック『教義史綱要』によれば、ルネサンスの時代には、新プラトン主義と『ヘルメス文書』がヨーロッパで流行し、今日では『ヘルメス文書』に含まれるいくつかの著作はグノーシス主義のものであったこと、19世紀後半から20世紀半ばには、コプト語で書かれたグノーシス文献が相次いで公刊され、研究資料はだいぶ整えられた、という。

また、9世紀以前には『ヘルメス文書』は新プラトン主義の祭儀文書と考えられていたことより、グノーシス主義は新プラトン主義の思想的影響が強いと言える。

以上は以下の文献などを参考にした。

荒井献『原始キリスト教とグノーシス主義』（岩波書店1971年）、ハンス＝ヨナス『グノーシスの宗教—異邦の神の福音とキリスト教の端緒』（人文書院1986年）、荒井献『新約聖書とグノーシス主義』（岩波書店1986年）、アドルフ＝フォン＝ハルナック『教義史綱要』（久島千枝、1997年）、大貫隆『グノーシスの神話』（岩波書店1999年）、クルト＝ルドルフ『グノーシス—古代末期の一宗教の本質と歴史』（岩波書店2001年）、大貫

- 隆『グノーシス 陰の精神史』(岩波書店、2001年)、大貫隆『グノーシス 異端と近代』(岩波書店、2001年)、筒井賢治『グノーシス—古代キリスト教の“異端思想”』(講談社、2004年)、柴田有『グノーシスと古代宇宙論』(勁草書房 1982年)。
- 11 因みに、近年のTBSで放映された「SPEC」というドラマの世界観に極めて近似するといえよう。このドラマにも2種類の人間が存在し、ガイアの神の系列の人間とそうでない人間であり、前者は普通の人間にない「SPEC」とよばれる超能力を持ち、次世代に残る存在と設定されていた。
 - 12 クリストファー＝ヘンリ＝ドーンソン『アウグスティヌス—その時代と思想』(筑摩叢書、1969年)。
 - 13 アンリ＝フォション『至福千年』(みすず書房、1971年)。
 - 14 岡崎勝世『聖書 vs. 世界史』(講談社現代新書、1996年)。
 - 15 ジョン＝ロック『人間悟性論』(岩波文庫、1972-4年)、『知性の正しい導き方』(お茶の水書房、1999年)など参照。
 - 16 この想定について、或いはそれこそ歴史的に見て、最終的に終末論的世界観＝発展史観に収斂しているのではないかという批判があるやもしれないが、しかし、現在までのプロセスで、ギリシア的コスモスの世界観とユダヤ、キリスト教的終末論的世界観が、交互に台頭してきていることを踏まえれば、未来は確定されていない以上、非終末論的世界観がヘゲモニーを握る可能性を想定することは、あながち間違いとは言えなはずである。例えば、シュペングラーは『西洋の没落』(村松雅俊訳、五月書房、2007年)で、文明的な比較形態学を志向し、文明が栄枯盛衰することを主張して、西ヨーロッパの没落を説いている。
 - 17 フランシス＝フクヤマ『歴史の終わり』(三笠書房、1992年)等はその代表的見解と言えるだろう。
 - 18 ここでいう歴史とは「1.「宇宙的終末論」と「歴史的終末論」」で指摘した発展史観のことを指す。このような注を付さなければいけないこと自体、20世紀以降の歴史観において、如何に終末論的世界観に淵源をもつ発展史観が支配的で、歴史が発展史観と同義にとらえられてきたかを示す証左と言えるだろう。

(つかもと つよし 本学非常勤講師)